

女たちの明治維新

第五回

愛加那と西郷イト

画：chinatsu

文：東川 隆太郎

鹿児島市生まれ。NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事。地域資源、鹿児島県内の歴史を機軸とした、鹿児島・九州の魅力を観光・教育・まちづくりに展開させる活動に従事。



身重の愛加那は菊次郎とともに西郷の帰藩を見送った。

西郷隆盛は生涯三度の結婚を経験している。一度目は西郷が二十代で、藩主・島津斉彬の下で、国事に奔走していた頃のこと。正確な理由は不明だが、江戸での活動が中心となる時期に離縁している。

二度目は西郷が奄美大島に潜居していた時期。安政六（一八五九）年の十一月、島の女性である愛加那と結婚している。

別れの決まっていた島での結婚

愛加那は西郷が居住していた屋敷の持ち主の親戚にあたる女性で、当時二十三歳。西郷とは十歳の歳の差があった。奄美大島へ潜居してすぐの西郷は、雨続きの天候や興味本位で覗きに来る島の人々に気が滅入っていた。そんな中、支えとなる女性の登場は西郷にとって大きな存在となったであろう。実際、島でのふたりの生活は仲睦まじいもので

あったようで、人前でもはばかりことなく寄り添っていたとの言い伝えもある。藩政の中枢での働きから離れた島での生活が、西郷をおおらかな気分にしたのかもしれない。西郷は愛加那との間に菊次郎、菊子の二人の子をもうけた。

しかし、この結婚は始めから別れが予想されていたものでもあった。当時、島で娶った妻は島を離れることが許されておらず、文久二（一八六二）年、西郷は妻子を残して帰藩しなければならなかった。わずか三年ほどの結婚生活であった。

苦難のなか大家族を支えた妻

三度目は藩政に本格的に復帰した後の慶応元（一八六五）年一月。三十九歳の西郷は十六歳年下のイトと結婚する。ただし、この頃の西郷は明治六（一八七三）年に政府の官職を辞して帰郷するまで国政に奮励する



西郷イト



愛加那

愛加那 略歴

- ▶天保8年(1837)
奄美大島に生まれる。
-
- ▶安政6年(1859)
西郷隆盛と結婚。
-
- ▶文久2年(1862)
隆盛と別離。
-
- ▶明治35年(1902)
享年66歳で死去。奄美大島・龍郷町の墓地に埋葬される。

西郷イト 略歴

- ▶天保14年(1843)
鹿児島城下に生まれる。
-
- ▶慶応元年(1865)
西郷隆盛と結婚。
-
- ▶大正11年(1922)
享年80歳で死去。
東京・青山墓地に埋葬される。

それぞれの晩年

日々を送っており、奄美時代のような夫婦で過ごす時間は限られたものであっただろう。また、鹿児島島の西郷家にはイトと三人の息子をはじめ、西郷の弟らや、教育のため島から呼びよせた菊次郎、菊子などが暮らしていたが、東京で暮らし、多忙な西郷に代わり、イトは農業や養蚕などを行ってこの大家族を支えた。

西南戦争の最中には家族を避難させ、西郷の最期となる官軍の城山への総攻撃を見守るしかなかった。戦争後は、明治二十二(一八八九)年に西郷の賊名が除かれるまで、賊軍の将の家族として苦しい立場にあったが、慎ましい暮らしを続け、遺された子らを育てあげた。

愛加那は西郷が去ったあとにも他に嫁ぐことはなく、奄美大島で生涯を過ごした。寂しい暮らしではあっただろうが、息子の菊次郎は折にふれて愛加那に手紙をしたため、「今更私共が望む処は母上様御元気の処を奉折候」と遠く離れた生活の中で母の健康やかな暮らしを願い、気遣っていたようだ。

イトは長生きをし、晩年は息子・寅太郎の東京の家で息子や孫たちと暮らした。明治三十一(一八九八)年に東京の上野公園に西郷の銅像が建立された際には、銅像の着流し姿を見て「こんな人ではなかった」と漏らしたという逸話もある。

愛加那とイト。ふたりの境遇は違わずにせよ、それぞれの苦難を背負いながら西郷を支えた妻たちであった。